

貴	方	は	、	『	内	科	医	と	違	う	小	児	科	外	来	を	し	て	い
ま	す	か	？	』															
	表	題	の	よ	う	な	質	問	を	さ	れ	た	場	合	、	開	業	小	児
科	医	の	何	人	が	ハ	イ	と	手	を	上	げ	て	く	れ	る	だ	ら	う
か	？	子	供	の	喜	び	そ	う	な	建	物	や	お	も	ち	ゃ	を	揃	え
た	“	こ	ど	も	の	国	”	も	ど	き	の	外	観	や	待	合	室	が	有
る	か	ど	う	か	で	は	な	く	、	診	療	内	容	に	つ	い	て	の	質
問	で	あ	る	。															
	昭	和	44	年	4	月	慶	應	義	塾	大	学	小	児	科	学	教	室	に
入	室	し	た	初	日	の	朝	、	小	児	科	病	棟	へ	顔	を	出	す	と
病	棟	医	長	の	小	佐	野	満	先	生	（	現	、	名	誉	教	授	。	当
時	、	講	師	）	が	待	っ	て	お	ら	れ	、	い	ろ	い	ろ	と	注	意
事	項	を	説	明	さ	れ	た	後	に	、	「	み	な	さ	ん	、	小	児	科
と	内	科	の	違	い	を	ご	存	知	で	す	か	？	」	と	尋	ね	ら	れ
新	人	6	名	答	え	に	困	っ	た	覚	え	が	あ	る	。	先	生	は	、
「	ど	ん	な	下	痢	で	も	治	せ	る	。	予	防	接	種	の	相	談	に
の	れ	る	。	育	児	の	相	談	に	の	れ	る	。	こ	の	三	つ	で	す
」	と	言	い	切	ら	れ	た	。	次	に	、	乳	児	室	に	廻	っ	て	行
く	と	、	テ	ー	ブル	の	上	に	ミ	ル	ク	が	入	っ	た	哺	乳	瓶	
が	6	本	用	意	さ	れ	て	い	た	。	そ	の	脇	に	は	ス	ト	ッ	プ

ウォッチを持った乳児室長の老川忠雄先生（
 39回生）が立っておられ「これからミルクの
 み競争をする。」、「ヨーイ・スタート。」訳も分
 からず哺乳瓶にしゃぶりついた。6人は互い
 に負けまいと必死に飲み干し、次々と哺乳瓶
 をテーブルに置いた。そこで、老川先生は、
 おもむろに「赤ちゃんは、毎日何回もこのよ
 うにして母乳・ミルクを飲んでいることを忘
 れないように。」言われた。このような指導は、
 病棟や外来での一寸の時間に、酒の席で、医
 局で出前を食べながら・・・、それとな
 く先輩諸先生方より、小児科医としての心構
 えを教えてもらえた良き時代であった。
 一方、当時は第二次ベビーブームの真っ只
 中であり、しかも、出張先の病院では、小児
 科医は2～3人しか居らず（freshmanを含め）、
 指導医も厳しく、野戦病院を思わせる程の忙
 しさであった。しかし、そこでは大学病院と
 は違った風邪や麻しんや風しんなどの流行疾
 患・嘔吐下痢・緊急を要する外科疾患など豊

富な臨床経験を積ませていただけた。
 昭和53年に新生児救急センター（NICU）を
 旧総合太田病院（現太田記念病院）に開設し
 10年間、若い先生方と共に昼夜を問わず重症
 新生児の治療に明け暮れた頃、病児の家族も
 また、面会時の窓越しに、我が子のために頑
 張っている先生方やスタッフの誠意と努力を
 見逃していないということも実感した。新生
 児病児の治療を実践したことにより、小児の
 医療とは、病気を見るだけでなく患者（＝病
 児＋その家族）を看る医療であることを教え
 られた。
 新生児医療に疲れ、開業するにあたり、「
 開業小児科医として子供たちにできることは
 何か？」を考えた。その結果、修行時代の諸
 先輩方の言葉や行動を思い出しながら、新生
 児室でのお母さん・お父さんとの会話を思い
 出しながら、「開業医としての小児医療は、
 親の話をよく聞き、しっかり診察をして、病
 気の原因を読む医療。」と考え、舌圧子と聴診器

だけでクリニックをスタートした。
 開業して25年、古希も過ぎて考えることは
 「小児科医による小児医療とは何だろうか。」で
 ある。小佐野先生はじめ諸先輩より「下痢治
 療の結果は、翌日の便に出る。その結果を踏
 まえて次の日の結果を予想しながら修正する。
 」下痢治療の基本と教えられた。そこには、
 子供がいて、下痢を治そうとする家族がいて、
 そして、相談に乗っている小児科医がいた。
 マニュアル通りに検査して、薬を出して、ダ
 メなら点滴をする医療と何か違う気がする。
 小佐野先生の言われた「どんな下痢でも治せ
 る。」とは、この違いであったのだ。臨床小児
 科医として忘れてはいけない心構えを小児科
 医としてのスタートの日に教えていただいた
 のだと遅まきながら最近になってやっと理解
 できた次第である。
 良き指導者・良き先輩に出会えたことに感
 謝するとともに慶応義塾大学小児科学教室の
 奥の深さに今更ながら感動しております。